
日本ロシア文学会

関東支部報 No. 36(2018年5月)

〒153-8902 目黒区駒場 3-8-1 東京大学駒場キャンパス 18号館 乗松亨平研究室気付

日本ロシア文学会関東支部事務局

E-mail: knorimatsu@nifty.com

来る2018年6月2日(土)11時より、早稲田大学戸山キャンパス36号館681教室にて、春季発表会が催されます。3本の修士論文成果報告と、6本の博士論文成果報告がおこなわれ、その後、支部総会と懇親会が開催予定です。本報に発表要旨を収録しております。奮ってご参加ください。

11:00-11:05 開会の辞

[修士論文成果報告]

11:05-11:35 井伊裕子「サヴラソフの広野モチーフの位置付け：「月夜。沼」「沼の日没」を中心に」

司会：河村彩（東工大）

11:35-12:05 大内悠「ソヴィエト・ウズベキスタンにおけるイーゼル絵画芸術の形成と展開—1920–30年代を中心に—」 司会：河村彩

12:05-12:35 櫻間瑞希「タタール・ディアスポラにおける民族語継承：アスタナのタタール人の言語選択に焦点を当てて」 司会：朝妻恵理子（慶應大）

[博士論文成果報告]

13:30-14:05 清沢紫織「ベラルーシ共和国における国家語政策：地位計画、実体計画、普及計画の観点から」 司会：朝妻恵理子

14:05-14:40 菅井健太「ブルガリア語方言における対格標識 ПЪ をめぐって」 司会：堤正典（神奈川大）

14:40-15:15 北井聡子「ネップ期ソ連における集団主義と性」 司会：高柳聡子（早大）

15:30-16:05 小澤裕之「ダニイル・ハルムスの手法と詩学」 司会：野中進（埼玉大）

16:05-16:40 古宮路子「「弱さ」と「反社会性」の行く先——オレーシャ『羨望』におけるヒロイン像の生成」 司会：佐藤千登勢（法政大）

16:40-17:15 高橋知之「「驚くべき十年間」再考——1840年代のロシア文学における「反省」と「直接性」の問題」 司会：粕谷典子（早大）

17:20-17:40 支部総会

18:00- 懇親会 於「アットン」（新宿区西早稲田1-22-2 tel: 03-3205-8267）

会費：常勤職（任期付を含む）にある方 5,000円 それ以外の方 3,000円

年をとるとどうしても話が懐古的になってしまうのだが、今回も30年以上昔の思い出を記すことをお許し頂きたい。私がここに紹介したいのは、スロヴァキアのルシストでありスラヴ民族学者、神話学者、宗教学者でもあったヤーン・コモロフスキー氏の数奇な運命である。私が彼と出会ったのは、1986年の1月下旬にモスクワで開催されたソ連作家同盟の主催による「『イーゴリ軍記』800年記念国際会議」であった。この会議の主旨は、『イーゴリ軍記』の各国語訳を報告しあう、というもので、私はそこで『イーゴリ軍記』の日本語訳について報告した。その会議の直前の1月18日に『イーゴリ軍記』の研究者で日本語への訳者のお一人木村彰一先生が亡くなられ、そのことも私の報告の最後で伝え、議長の計らいで参加者全員に黙祷を捧げて頂いた。コモロフスキー氏は彼自身による『イーゴリ軍記』のスロヴァキア語訳について報告していた。

会議の後で参加者はキエフに招かれ、そのエクスカーションで郊外の民俗建築博物館を訪れた際に、何故かコモロフスキー氏とウクライナ民謡をハモることになった私が、何故あなたがウクライナ民謡を？と尋ねると、最初は単なるスロヴァキアの中世ロシア文学の専門家、と思っていたコモロフスキー氏は、実はかつてブラチスラヴァのコメンスキー大学で中世ロシア文学とスラヴ民族学を教えていた研究者で、単に中世ロシア文学に造詣の深いルシストであるばかりでなく、スロヴァキア民俗学、さらにはそれを基盤としたスラヴ比較民族学をも専門とする私の同学の氏であることがわかった。東スロヴァキアに接する現在のウクライナ・ザカルパッチャ州は戦前チェコスロヴァキア領であり、ボガティリョーフの『カルパチア・ウクライナにおける呪術的行動、儀礼、習俗』(1924)はその時代の彼のこの地域のフィールド・ワークの成果であるが、1924年生まれのコモロフスキー氏は、この地域を含む東スロヴァキアのウクライナ人の民俗にも詳しく、自然と汎スラヴ的な比較文化の目を養っていたらしい。彼には『スラヴ人の伝統的婚礼』(1976)というこの分野では先駆的でありまた現在まで唯一の著作がある。私が彼のこうした仕事に関心を持ったのはいうまでもない。

私はその年の8月にスロヴァキア語・スロヴァキア文化セミナーを受講しにブラチスラヴァを訪れた。コモロフスキー氏と再会することも目的の一つであった。トレンチーンに住む彼を訪れると、彼は古い日本の絵葉書を出してきて、「私の父はチェコスロヴァキア軍団の一員として極東から日本に渡り、横浜に少しの間滞在した。父からは日本の話をよく聞かされたものだ」という。彼は近著『プロメテウス 神話学的比較』(1986)を下さったが、この著書は予てから氏が注目してきたバルカン・カフカーズ間に認められる顕著な文化的対応を神話学の領域で検討した壮大なものだった。

話しているうちに、彼が戦前のブラチスラヴァのコメンスキー大学で教鞭を取っていた

ピョートル・ボガティリョーフをよく知っていたことを知った。ボガティリョーフは 1934 年から 1940 年までこの大学で教えており、1924 年生まれのコモロフスキー氏はその時の彼をよく知っていただけでなく、彼の機能構造主義民俗学に方法論的に強い影響を受けていた。1968 年にブラチスラヴァで創刊されたスラヴ民族学の国際雑誌『エトノロギア・スラヴィカ』の編集委員をコモロフスキー氏はボガティリョーフと共にその創刊時から務めている。そして 1971 年にボガティリョーフが亡くなるとこの雑誌の 5 号にコモロフスキー氏は彼の追悼文を書いている。

ところでヤーン・コモロフスキーとはどんな研究者だったのか？ 彼は 1924 年トレンチーン生まれ。1945 年にコメンスキー大学に入学し、1951 年に卒業。修士号をスラヴ比較フォークロアの分野で受ける。1945 年から 54 年までスロヴァキア科学アカデミー・言語学研究所の研究員。1954 年から 59 年までコメンスキー大学のロシア文学講座で中世ロシア文学を講じ、この時期に『イーゴリ軍記』や『アヴァクーム自伝』のスロヴァキア語訳を残している。同時に 55 年に科学アカデミー民族学研究所のスタッフと民俗調査を行い、57 年に最初の著書『散文フォークロアにおけるマテイ・コルヴィーン王』を出版したが、そこでソ連時代に批判されていたアレクサンドル・ヴェセロフスキーの方法を使ったことと、大学で事実上の教会文学である中世ロシア文学を熱烈なカトリック教徒の立場から講義していたことが、戦後社会主義時代の大学当局の忌諱に触れ、大学を解雇された。彼は「キーエフ・ルーシは国際的なキリスト教国で、カトリックの国と言ってよい」と教えていたらしい。『アヴァクーム自伝』の翻訳の際に解説として書いたアヴァクーム論も、ソ連の学者の論文に差し替えられてしまったという。

彼が再び教壇に復帰したのは、1969 年、いわゆるチェコスロヴァキア事件の直後である。一見不可解なこの復帰は、彼の最初の専門がロシア文献学であったことが幸いしたのかもしれない。彼は 1975 年まで大学の今度はスラヴ民族学の講座で教鞭を取ったが、再び解雇される。この時期の彼の著作『宗教とフォークロアとしての神話』(1973) の表題からも推測できるのだが、彼の民族学講義が宗教学的色彩を帯びすぎていたためらしい。解雇後の彼はその後工場の守衛の仕事につくことになる。1984 年に年金生活に入り、「幸いものを書くことは禁じられていなかったのだから」それから彼のむしろ旺盛と言ってよい執筆活動が始まる。「『イーゴリ軍記』800 年記念国際会議」に招かれたのはこの頃である。モスクワで『イーゴリ軍記』のスロヴァキア語訳について語れる人は年金生活者の彼しかいなかったのだ。この頃ソ連ではペレストロイカの風が吹き始め、ローセフのソロヴィヨフ論が出版されて話題になっていた。コモロフスキー氏はそれが何とか読めないか、と気を揉んでいたが、東西教会の統一を説いたソロヴィヨフに、カトリック教徒の彼は熱い関心を寄せていた。私が 1986 年に彼と会った時も、彼は民衆文化における倫理観の分析に力を注いでおり、この視点から日本神道の「罪」、「穢れ」、「祓」といった観念に強い興味を示していた。

彼が三たび不死鳥の如くコメンスキー大学の教壇に立ったのは、彼が 66 歳の時、1990 年のチェコスロヴァキアのビロード革命の後である。しかしこの時彼が教壇に立ったのは、も

はやロシア文学でもスラヴ民族学でもない、社会主義時代には望むべくもない宗教学の講座であった。彼はその講座のスロヴァキアの戦後初めての教授となった。実はこのテーマが彼が生涯最も取り組みたいテーマであったのだ。出版が禁じられていたアレクサンドル・ヴェセロフスキー論を 1992 年に出した後、『聖なるものへの道』を 1999 年に出版、2007 年に『パラグアイの処女林とサバンナの中の神の国』を出版した時彼は 83 歳であった。

好きなテーマを好きなように勉強できる若い研究者の皆さんには想像もできないような苦難を乗り越えて、不屈のコモロフスキー氏はその学問的関心を自らの最初の専門にこだわることなく押し広げて、その研究生活を自らの良心に従って貫いた。その彼の生き様に、安穏な研究生活を送っていた怠惰な私が励まされ続けてきたことを若い研究者の方々に知っていただきたく、この些か長々しい巻頭言を書かせていただいた。彼は宗教学の教授として 87 才の生涯を 2012 年に閉じたのである。

サヴラソフの広野モチーフの位置付け：

「月夜。沼」「沼の日没」を中心に

井伊裕子（東外大博士課程）

アレクセイ・コンドラーティエヴィッチ・サヴラソフ(1830–1897)はロシア移動派を代表する風景画家であり、絵画として描かれることの少なかったロシア内陸部の農村風景を本格的に絵画化した画家として知られている。本発表ではサヴラソフの広野を描いた二作品『月夜。沼』«Лунная ночь. Болото»(1870年)、『沼の日没』«Закат над болотом»(1871年)を中心に画家が描いた農村風景の中でも、広野というモチーフがどのような意味を持っていたのか、その位置付けを探る。

ロシアにおける西洋絵画の受容自体は18世紀に入ってからだったが、実作品においてロシアの田園風景が本格的に描かれるようになるのは19世紀半ば以降である。その後ロシアの自然を題材とした風景画は一つのジャンルとして確立し、風景画の主流となっていくことになる。森林、村落、ヴォルガ、平原など多様な風景が絵画化されていくが、とりわけ構造物のない広野はアカデミーで教育される西洋絵画のメソッドへの応用が難しく、ロシアの広野そのものが題材となるのはサヴラソフの上記の作品が嚆矢になる。

まず本発表で扱う二作品に共通するのは、タイトルから明らかなように月夜と日没という時間帯を選択し、天候・時間の転変が画面を構成する重要なモチーフとなっている点である。『月夜。沼』で描かれている夜という題材はこの先の画家自身の作品にも、また他の移動派画家の作品にもあまり見られず、アイヴァゾフスキーに代表されるロマン主義の影響が色濃い。一方で『沼の日没』においては画家の興味は画面の三分の二を覆う空と光へと移り、自然主義的な態度が押し出されている。

またもう一つ注目すべきなのは、絵画表現における物語性の排除である。サヴラソフの作品を含め、従来ロシアの農村を描く際には農民が不可欠であり、一定の物語性が付与されていた。ところが70年代初頭、広野の表現を皮切りに画家の作品から人間が排されていく。放牧が描かれている『月夜。沼』に対して、『沼の日没』においては一切の点景物が排除されている。

自然光への関心と人物を極力排除した画面の構成は画家が後に確立するいわゆる「ムード風景画」を特徴づけるものである。本発表では画家が自身の「風景画」を確立する契機としての広野の位置付けを試みる。

ソヴィエト・ウズベキスタンにおけるイーゼル絵画芸術の形成と展開

—1920-30年代を中心に—

大内悠（東外大修士課程修了）

本報告は、ソヴィエト・ウズベキスタンにおいてイーゼル絵画芸術がいかにして形成・展開されたのかを整理するとともに、1920-30年代前半にかけて同地の絵画芸術に対するイデオロギー的な締め付けがソ連中央のそれと比して緩やかであった要因について検討する事を目的としている。

本報告の構成は以下の通りである。まずウズベキスタンにおけるイーゼル絵画芸術の誕生とその展開について、主に当時の新聞や雑誌記事等の同時資料をソースとして用いながら分析した。その結果、ウズベキスタンの画家たちは、ソ連中央の芸術界と比べると、当局による制限や過度な批判をあまり受けることはなく比較的自由に創作活動を行うことができたという事が明らかになった。イデオロギーの引き締めが一段と強化された1920年代末以降になると、確かにウズベキスタンの芸術家の絵画作品の主題は農民や労働者といった「社会主義リアリズム」的なテーマへと変容したが、創作手法に着目すれば、「現実の忠実な再現描写」というリアリズムの用法が必ずしも全ての芸術家によって順守されていたわけではなかった。多くの画家たちが用いた手法はリアリズムではなく、本来「ブルジョア形式主義的」として批判対象となっていたはずの「プリミティヴィズム」であった。

次に、1920-30年代前半にかけてウズベキスタンの絵画芸術界にみられた「創作の自由」の要因について、民族や民族文化に対するソ連当局の優遇政策や、「形式において民族的、内容において社会主義的」というスターリン・テーゼ、また絵画芸術に関する当時の批評記事などを手掛かりにして分析を行なった。その結果、文化や芸術のあらゆる分野で「民族的」な要素や形式の表象・発現が積極的に奨励されていた当時の社会的な背景の中で、先述したウズベク絵画における「プリミティヴィズム」の傾向は、「ブルジョア形式主義」ではなく「民族的／ウズベク的な絵画潮流」として見なされ、ウズベク絵画に独自の「色彩的／装飾的リアリズム」であると賞賛されていたという事が分かった。

以上より、筆者は次の結論を導いた。それは、1920-30年代前半におけるウズベキスタンの絵画芸術は、ソ連当局や芸術批評家が掲げていた「民族文化の確立と奨励」や「民族的形式の創造」という名分のもと、「プリミティヴィズム」といった非写実的な創作手法が「民族的な形式」としてある程度許容され、本来の社会主義リアリズムが厳しく芸術家に要求されることが少なかった、ということである。既存の先行研究では、ウズベキスタンの芸術界における「創作の自由」は地理的要因、つまり同地はソ連中央から離れていたため当局の監視が届かなかったという条件に依るものだと説明されてきたが、本報告によって、当時のソ連の民族文化政策、および民族絵画芸術に対する見方や評価といった「社会的要因」が、ウズベク絵画芸術界の「創作の自由」を形成したという可能性が提示された。

タタール・ディアスポラにおける民族語継承：
アスタナのタタール人の言語選択に焦点を当てて

櫻間瑞希（筑波大博士課程）

さまざまな国や地域にコミュニティを形成するタタール人は、居住地によって民族語継承・保持の状況も大きく異なることが以前から指摘されてきた。かつてはソ連邦の構成国として歴史を歩んだ中央アジア諸国は、独立後の言語政策の方向性にはそれぞれ差異が見られることから、独立後の民族語を取り巻く状況と、その背景を検討するには適したフィールドであるといえる。なかでもカザフスタンは、タタールスタン共和国の在外同胞政策のなかでは、最も大きなタタール・ディアスポラが存在する国として位置付けられ、政策の成果が期待されている。本発表は、カザフスタンに居住するタタール人の言語選択と民族語保持・継承の実態を、とりわけ日常生活における言語選択に注目し、社会言語学的な視点から明らかにすることを目指すものである。具体的には、「民族語であるタタール語がカザフスタンに居住するタタール人の日常生活においてどのようなモチベーションで選択され、使用されているのか」、加えて「ロシア語や国家語たるカザフ語はどのような場面で使用され、あるいは併用され、あるいは言語の棲み分けがなされているのか」を課題として設定し、質問票を併用した聞き取り調査を実施した。

なお、カザフスタンでは国家語であるカザフ語を中心的な言語と位置付けてはいるものの、ロシア語にも公用語の地位を与え、英語も重視する方針で言語政策が展開されている。ロシア語を公用語として維持していることから、ロシア語話者からの反発は今のところ収まってはいるものの、カザフ語の地位向上と英語重視の方針から、ロシア語の権威や社会的機能は相対的に低下する傾向にある。こうした三言語政策の展開により、とりわけ若い世代のあいだでは三言語の習得は当然視されるようになりつつあり、自身の優秀性を示すためにもさらに言語を学ぶ動機が生じている。聞き取り調査の結果、自身の価値づけをモチベーションとして、習得したカザフ語と言語的類似性のあるタタール語への関心を高める事例が多く確認された。こうした点で、カザフスタンの三言語政策はカザフ語とロシア語の地位を確保したことで国民の反発を最小限に抑え、さらに民族的なカラーのない英語を加えた三言語を習得した人物を「理想的なカザフスタン人」としたことで、多くの非カザフ人を言語政策に巻き込むことに成功しているともいえる。なお、アスタナのタタール人にとって、ロシア語は現在に至るまで公的な場・私的な場を問わずに広く選択される言語であり続けている。若年層のあいだでは、ロシア語に加え、カザフ語や英語も習得した人物が「理想的なカザフスタン人」として捉えられる傾向にあり、カザフ語の使用範囲も広がりつつある。一方で、社会的要求からカザフ語を選択しなければならない場面は増加しており、同化の危機感からタタール語に注目する事例も確認された。つまり、同化に抗うために自身の民族性を再認識し、宣言するための手軽なツールとしてタタール語を利用している可能性も指摘できる。

ベラルーシ共和国における国家語政策：
地位計画、実体計画、普及計画の観点から

清沢紫織（筑波大博士課程修了、日本学術振興会特別研究員）

旧ソ連の多くの共和国は、1991年のソ連崩壊と独立以降、体制移行期における国家建設の過程で基幹民族語の社会的地位と機能を政策的に強化し、社会全体の脱ロシア語化と基幹民族語の普及を着実に進めてきた。しかし、ベラルーシ共和国は、ソ連崩壊以降もロシア語の優位さが例外的に顕著であり、かつ基幹民族の民族語であるベラルーシ語の復興及び普及が困難を抱えている事例として知られている。本研究は、今日のベラルーシ共和国において基幹民族の民族語であるベラルーシ語がなぜ社会へ十分に浸透・普及し得ていないのかという点を問題意識の中心に据えて、同国における国家語政策の実状を、地位計画、実体計画、普及計画という言語政策的な観点から総合的に論じるものである。

まず、地位計画に関わる問題として、ベラルーシ語の法的地位と実質的地位の乖離をめぐる問題を中心に論じた。法律文書の分析から、1990年より正式にベラルーシ語に付与された「国家語」という地位は元々象徴的な性格の強いものであったこと、そして現在のベラルーシ語の「国家語」としての地位は1995年のロシア語の国家語化を経て極度に形骸化している実態が浮き彫りとなった。また、ベラルーシ語を法的に保護することの困難さの背景には、文化財としてのベラルーシ語の保護の問題とロシア語の使用を望む話者の言語権の保護の問題との恒常的な緊張関係があることを指摘した。

次に、実体計画に関わる問題として、現代ベラルーシ語に見られる標準語規範の分裂をめぐる問題を中心に検討した。今日、現代標準ベラルーシ語に生じている公式規範とタラシケヴィチ規範への分裂は、標準ベラルーシ語が、1)自発的発展の段階、2)政策的発展の段階、3)分裂的発展の段階、4)競合的発展の段階、5)強制的統合の段階、という5つの段階を経る中で生じ発展していった。分裂した2つの規範は、現在ベラルーシ国内で競合と対立の関係に陥っている。その結果、タラシケヴィチ規範が公式規範の社会的威信を脅かす形で標準ベラルーシ語自体の不安定化を助長している。

最後に普及計画に関わる問題として、教育を通じたベラルーシ語の普及実態をめぐる問題を中心に論じた。ベラルーシでは、独立以降、ベラルーシ語が普通教育から高等教育まで必修言語とされ、国民はベラルーシ語により教育を受ける権利を保障されている。しかし、実際にベラルーシ語によって教育を受ける生徒・児童は、90年代前半に一時的に増加したものの、1995年のロシア語の国家語化以降は一転して減少している。筆者がベラルーシの若者世代に実施したアンケート調査からは、回答者の多くが次世代にベラルーシ語の運用能力の獲得を望んでいるものの、ベラルーシ語で教育を受けさせようと考えたり、子どもと実際にベラルーシ語を用いて話そうと考えている者は少なく、自身が進んでベラルーシ語の継承に関わろうとする意志は強くないことが明らかとなった。

ブルガリア語方言における対格標識ПЪをめぐって

菅井健太（東外大博士課程修了、筑波大）

ブルガリア語は、本国以外でも、周辺諸国を中心にブルガリア系住民によってマイノリティの言語として用いられている。ブルガリア共和国とドナウ川を挟んで隣国であるルーマニアにおいてもブルガリア系住民が各地に点在しており、それらの人々によってブルガリア語は今日まで保持されている。本発表では、特にルーマニア・ブカレスト郊外のブルガリア人集落であるブラネシュティで用いられるブルガリア語方言（以下、ブラネシュティ方言）を対象とする。ブラネシュティ方言話者がルーマニア語も話すバイリンガルであることから、同方言にはルーマニア語の影響によって生じたと考えられる言語特徴が数多く見られ、対格標識 ПЪ もそのような特徴の一つと考えられている。これまでの研究では、対格標識 ПЪ は、ルーマニア語からの借用語であるということをはじめとしたごく簡単な記述しか存在しておらず、借用された対格標識がブルガリア語方言のなかでどのような用法上の特徴を持ち、どのように機能しているかなどは明らかにされておらず、より充実した言語資料をもとにした詳細な研究が不足していた。したがって本発表は、ブラネシュティにおけるフィールドワークで収集した方言資料にもとづき、対格標識 ПЪ の用法の記述分析を行い、ブラネシュティ方言における ПЪ の実態の究明を目的とする。

本発表ではまず、ПЪ が対格標識と考えられているにもかかわらず、明示的な格標示がされる人称代名詞非接語形対格と義務的に共起する一方で、それ以外の名詞句との共起は随意的であるという用法上の特徴に着目する。ПЪ が対格標識以外にも別の機能を有しているという仮説をたて、ПЪ がどのような名詞句と共起するかということについて、共起頻度に着目した分析を行う。分析の結果、ПЪ と共起する名詞句は、そのほとんどが後置定冠詞や指示代名詞などを伴ういわゆる定の名詞句であることや、人間や動物など有生物を指示する名詞句であることを実際の用例を提示しながら示す。このようにブラネシュティ方言では、定または有生である名詞句が直接補語となる場合に、対格標識 ПЪ が用いられうるといえることを明らかにする。また、語彙的に定かつ有生である人称代名詞は、定性と有生性の両方のパラメーターを満たすため、対格標識 ПЪ を義務的に用いることができると考えられることも指摘する。以上より、ПЪ は、定かつ有生である直接補語を標示する機能をもった随意的な対格標識であるという結論を導く。

ネップ期ソ連における集団主義と性

北井聡子（東大博士課程修了、東大他（非））

本研究は、アレクサンドラ・コロнтаイの思想を中心とした、初期ボリシェヴィズムにおける〈集団主義と性〉の問題を扱ったものである。共産主義国家とは労働者の共和国であり、そして労働者とは、働ける成人男性が基準となっていることを考えた時、ボリシェヴィキが創り出そうとしたユートピアが、ミソジニックな傾向を肯定していくことは当然の成り行きであった。勿論、革命は男女平等を理念として掲げており、建前上は女の解放を歓迎すべきものとしていたが、その解放とは、基本的に「女を男にする」ということ以外の何物でもなかった。E・ボーレンシュテインは、著書『女なしの男たち』において、1920年代のソ連文学には「男だけの共同体」を求める強いパトスが反映されていることを指摘している。とはいえ、彼の議論でより興味深い点は、「女が如何に不在であり、排斥されたか」ではなく、幾ら熱心に女を駆逐しようとしても、男たちの同志的絆を媒介する為に、常に女が召喚されてしまう事態が描かれている点にあるだろう。それは亡霊のような身体なき女や機械、あるいは死んだ女の場合もある。女は殺され、抽象的な概念にまで縮小されながらも、完全に駆逐されることはない。我々は、ここに「ホモソーシャル性とホモセクシュアルは切れ目のない連続性の中にある」というあのセジウィックの論理が繰り返されていることを確認するのである。

さて本研究で、取り組んだのは、男たちによるこの「女の排除と包摂」のプロセスと、表裏一体の関係にある、女性を男たち集団世界の一員にする為のアレクサンドラ・コロнтаイの闘いである。ボリシェヴィキにおいては、経済制度が共産主義体制へと移行し、家事労働・子育ての共産化を通じて家族が解体されれば、女は自動的に全員労働者になる、という認識が支配的であった。女の解放とは何か特別な措置を取る必要もないことだったのだ。しかし家父長的家族を維持する秩序とは、外的な構造（経済・社会制度）のみならず、言語システムや精神構造等、人間の内部に組み込まれたものであって、さらに性愛行動の実践においてパフォーマティヴに日々再生産されていくものなのである。コロнтаイは、恐らくボリシェヴィキにおいてただ一人、家族の内部構造そのものの解体を模索した人物だといえる。現在においても、彼女は自由恋愛の提唱者だとか、「水一杯論」というフリーセックス運動を推進したなどと誤解されているが、彼女の性愛の論文や小説において示した解放の手つきは、そんなものを凌駕する別次元のラディカルさを有している。本研究では、彼女がアナーキーな性愛を称揚したと誤解される原因となった小説『三代の恋』のヒロイン、ジェーニャの謎を解読することも目標の一つとしているが、ジェーニャの過激な性愛の実践は、家父長制的秩序を攪乱し、家族に替わるオルタナティヴな集団が立ち現れる可能性を切り開くものであることが明らかとなるだろう。

ダニイル・ハルムスの手法と詩学

小澤裕之（東大博士課程修了、関東学院大（非））

本発表は、20世紀前半のロシアの詩人・小説家ダニイル・ハルムス（1905-1942）を俎上にのせた、発表者の博士論文の概要を説明するものである。

ハルムスはロシア・アヴァンギャルドの影響下で詩作をはじめ、なかでもロシア未来派の考案したザーウミ（理知を超えた言語／概念）の詩学を継承し、発展させた。ところが従来の研究では、ロシア・アヴァンギャルドの文脈内で論じられるというよりは、不条理という別の領域に進出した作家としてしばしば評価されてきた。第一に、戦後の不条理文学の先駆者として、第二に、彼が生きたソ連社会の非人道的な不条理を風刺ないし予見した作家として括られてきた。しかしながら、このようにハルムスを先駆者や予言者とみなす視座からは、彼が多大な影響を受けた同時代のロシア・アヴァンギャルド、とりわけロシア未来派の伝統は克服された過去として把握されてしまう。

そこで発表者は、ハルムスをロシア・アヴァンギャルドの文脈に改めて置きなおし、その時代の文学的／文化的事象、および彼自身の様々なテキストと照らしあわせることで、その詩学の全体像を浮かびあがらせた。彼は未来派詩人から不条理作家あるいは風刺作家へと変貌したのではなく、あくまでロシア未来派の詩学を独自の手法で達成しようとしたのである。

このような視点を可能にしたのは、第一に、狭義では新造語を指すロシア未来派の発明したザーウミという手法を、概念や理念のレベルとしても把握した点にある。第二に、その手法を音のザーウミと意味のザーウミに二分した点にある。この二つの手続きを踏むことによって、彼が音のザーウミから意味のザーウミへ手法の軸足を移動させ、さらには「出来事」や「妨害」といった手法を用いることで、理知を超えるというザーウミの基本理念の実現を目指していたことを立証することに成功した。

ハルムスの創作の外貌は時を経るにしたがい著しく変化してきた。そのため、のちに彼はロシア未来派の伝統を脱した先駆的な不条理作家として評価されるようになる。しかし詩学の本質まで変化したわけではない。ハルムスはザーウミの詩学を終生守りつづけたのである。

発表者が描きだすのは、ハルムスが初期から後期までの創作において、手法とジャンルを変化させながらも、人間の理知を超越しようと様々な実践をおこなってゆく、その軌跡である。

「弱さ」と「反社会性」の行く先
——オレーシャ『羨望』におけるヒロイン像の生成

古宮路子（東大博士課程修了、日本学術振興会特別研究員）

本発表は、オレーシャの代表的小説『羨望』（1927）をテクストロジーの方法で分析した博士論文「オレーシャ『羨望』草稿研究——人物像の生成を中心に」から、ヒロインのヴァーリャ像の生成プロセスについて論じた1章を抜粋したものである。公刊されたテキストのヴァーリャは、従来の研究では、美しく魅力的だが、周囲の男性の登場人物達によってイメージを操作されている、はっきりと性格づけされていない人物であると指摘されてきた。しかし、草稿から人物像の生成過程を探ると、オレーシャは実際には一定の確固とした人格を念頭に置いてこのヒロインを作品に登場させていることがわかる。その人格とは、魅力的だが「弱く」「反社会的」であるため、革命後のソ連社会に適応している男性の登場人物達によって「啓蒙」されつつある成長途上の人物、というものである。

ヴァーリャの前身はかなり早い段階から『羨望』の草稿に登場しており、現存する最古の断章の1つ『しゃぼん玉の日』では、リョーリャ・タタリノヴァという名前になっている。当初のリョーリャは、世間を混乱に陥れる発明家イヴァン・バービチェフの企てに加担する、美しくも「反社会的」人物として作品に加えられていた。その後の段階で、作品にカヴァレーロフが導入され、主人公になると、オレーシャはリョーリャをカヴァレーロフの元恋人として登場させるようになった。彼女はこの時期の異稿でも「反社会的」で「弱い」人物であり、酒に酔ったはずみで無理矢理交際させられることになってしまったカヴァレーロフから逃げ出した過去を持つ。やがて、オレーシャはこのような「弱く」「反社会的」なリョーリャを、「啓蒙」の対象として、政府高官アンドレイ・バービチェフや、サッカー選手で秀才のヴォロージャといった新しいソ連社会で活躍する男性達と結びつけるようになった。執筆の中期には、リョーリャはアンドレイ・バービチェフの妻になり、社会主義の社会に適応した人間になるよう「しつけられる」姿が描かれる。また、名前がヴァーリャと改められた後期には、ネップマンの元夫コースチャ・ベローフとの贅沢な暮らしを捨て、恋慕するヴォロージャによって教え諭される人物になっている。明瞭な二項対立図式の元に作品を構成する作家オレーシャは、ここで明らかに優と劣のコントラストを強調している。

『羨望』の完成期に、カヴァレーロフが前景化し、ヴァーリャは彼が時々見かける人物に過ぎなくなったため、彼女の登場は断片的になり、結果的に人物像の全貌が掴みづらくなってしまった。しかし、執筆過程で形成された、「弱く」「反社会的」だが社会主義によって「啓蒙」されつつある成長途上の人物という性格づけは、公刊されたテキストにも通底しているのである。

「驚くべき十年間」再考

——1840年代のロシア文学における「反省」と「直接性」の問題

高橋知之（東大博士課程修了、東大）

報告者の博士論文「反省と直接性のあいだ——ベリンスキーの構想、プレシチェーフの
実践、グリゴリエフの漂泊」は、1840年代のロシア文学を研究の対象としている。40年
代はロシア文学史・思想史において画期をなす時代とされてきた。ロマン主義からリアリ
ズムへの転換、西欧派とスラヴ派の形成および両者の対立、ロシア革命へと続く大きな潮流の
発端。これらが40年代をめぐる基本的な構図であり、先行研究はこうした構図のもとに個
別の現象を配置し、分析してきた。従来の構図は事実判断として正しく、基本的な枠組みと
して今なお有効でもあるが、一方で、研究対象に偏りを生じさせてきたことも事実である。
実際、40年代という時代は、リアリズムへの転換という図式のもと、西欧派を中心に語ら
れるのが一般的であった。近年では、所与の枠組みに抛らない新しい文化史の叙述もすでに
試みられており、本論文もそうした志向を共有している。本論文で試みたのは、従来の構図
のもとでは二義的な役割しか与えられてこなかった作家たちのテキストの分析を通じて、
彼らの文学史上の意義を明らかにするとともに、所与の文学史そのものを問い返すことで
あった。

博士論文の柱に据えたのは、ベリンスキーが提起した「反省」と「直接性」の問題である。
反省は、個人の自己意識の問題を表す概念として、ベリンスキーによってはじめて提起され
た。一方の直接性は、反省の対概念としてあり、原初的な調和を意味していた。これらの概
念は、ヨーロッパの諸思想のアマルガムとしてあり、同時に、ロシアの歴史的文脈に即して
捉え直されたものであった。反省から直接性へという希求は40年代に通底しているが、両
者をいかに結ぶかという問題に対しては、様々な立場が存在している。博士論文では、これ
らの観点からみて特異な位置に立つ二人の作家、アレクセイ・プレシチェーフとアポロ
ン・グリゴリエフを中心に、同じ問題圏に位置づけられるロシアおよびヨーロッパの作
家・思想家を対比的に論じ、ロマン主義、リアリズム、西欧派、スラヴ派という術語からな
る従来の布置連関にとらわれない文学史の叙述を試みた。

本発表では、博士論文の根幹に位置づけた反省と直接性の問題に焦点を絞ったうえで、博
士論文の成果の一部を報告する。第一に、ベリンスキー、ゲルツェン、トゥルゲーネフの評
論を分析し、40年代のロシアにおいて、反省と直接性がいかに問題化されたのかを検討し
たい。次いで、この問題に照らして40年代の思想的状況を問い返すことにどのような意味
があるのか、検討したい。この点については、プレシチェーフ、グリゴリエフ、サルト
ウイコフ＝シチェドリンらのテキストを参照し、反省と直接性の問題圏におけるそれぞれ
の位置を探りながら、従来の構図を相対化するような見方を提示したいと考えている。